

P 8 1 下から 6 行目 ～ P 8 2 1 6 行目まで

P 町は私が記憶していた上品な町並みではなかった。昔は立派だった瓦葺の家は、今は無残にも地面に半没しているがごとくの様相を呈し、毎朝綺麗に箒で掃かれていた小道は、乱雑に敷かれたブロックででこぼこしていた。家という家は我先にと建屋を軒まで突き出して醜く、ただでさえ狭い路地を余計に狭くしていた。私はその薄暗い路地をたどり、宿屋がある三叉路まで歩いてくる間、この町内に住む人たちを蔑み、見下していた。

三叉路を左に折れて、右手の三番目の家もまた、柱が大きく傾き門の敷居が道より低く、まるで沈みゆく廃船のような荒ら屋だった。表札も番地も無かった。私は向かいの家の手前まで下がり、その荒ら家のくぼんだ棟木と瓦の間に生い茂る雑草を目にしつつ、門の隙間から中の様子を伺った。廃屋のような家ではあるが、部屋は広く見えた。色も形も不揃いのごみ箱がいくつも置かれていて、そのどれもが中身があふれているのを見ると、まるで大家族が住んでいるようにも思えた。

私は大きく咳をしながら門を押した。玄関脇の部屋のかまどの前にしゃがみこんで、熱湯に浸かった洗濯物を棒でかき回していた女性が、私を一瞥した。中門は開いており、そこから広い中庭と多数の部屋が見えた。だが私は、間違いなくその玄関わきの部屋にノウネおじさんが寝かされているものと確信した。ソンプィョ兄が言っていた、独特の饅えた悪臭が鼻をついたからだ。

P 9 1 下から 4 行目 ～ 最後まで

やがて、おじさんは拳を握っていたかと思うと、口を開き始めた。私は彼のおぼろげな目に、静かに歓喜がにじむのを見えた。そして彼の声をはっきりと聞いた。

「ウンピョ、ああ、ウンピョ」

おじさんはそう言っていた。私はおじさんが自分の息子の代わりに甥っ子を連れて逃れてきてから、一度も子供の名前を口にするのを聞いたことが無かった。ウンピョの親友だった私を見ても、ウンピョと私を重ねて、どこかで元気に暮らしてくれればというような、悲壮な面持ちを見せることすら一度も無かった。彼は子供を拒絶するのと同時に、子供の名前までも忘却の彼方に追いやり、元から記憶に無いものとして生きている人のようだった。子供の代わりに甥っ子を連れて逃れて来たとき自慢話をする時の「子供」も、普通動詞としての「子供」であって、ウンピョという固有名詞としての「子供」ではなかった。

彼が初めて口にしたウンピョという言葉は、かろうじて私にだけ聞き取れるくらいのか

すかな声だった。しかし、私の耳には堅城をも崩す勢いの大声に聞こえた。彼は死力を尽くして叫んでいた。ああ、三十余年前のウンピョの母の叫びは、今ようやく報われたのだ。

私はその時をずっと待っていた。今日この日が来ることをずっと願っていた。だが、不思議なことに私の心の中では喜びよりも虚しさが勝っていた。

再びキーホルダーを売る露店が立ち並ぶ通りへ出たときは、すでに日が傾いていた。夕暮れ時になると、胸いっぱい錠前をぶら下げ、米袋と塩サバを下げて千鳥足で歩くノウネおじさんの姿が思い出された。米袋や塩サバのせいで錠前が勲章に見えたかつての馬鹿げた錯覚は、今となっては起こらなかった。彼は寂しく、貧相な錠前師に過ぎなかった。

私がおじさんを理解するに至るまで、実に32年を要したのであった。